

変わる日本の「暮らし」と「まち」

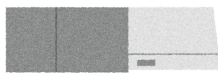
illustration: Shigeyuki Sakata

団地から始まる
新しい住まいへの技術開発

床シート増張り工事・
空家臭気低減工法
(2019年・令和元年)

阿部民子

text by Tamiko Aoe



戦後の復興が進む昭和31（1956）年。圧倒的な住宅不足解消のため、日本の新しい住宅のかたちとして誕生したのが公団住宅だ。そこには、最先端の設備と設計思想、住まい方への提案が盛り込まれ、またたく間に当時の人々の憧れとなった。

当時はまだ珍しかった水洗トイレや浴室などを標準装備。なかでも注目を浴びたのが、「ダイニングキッチン」だ。それまでの日本の家では、和室にちゃぶ台を出して食事をして片づけ、布団を敷い

て寝るのが当たり前。団地を建設した日本住宅公団は、「食べる」と「寝る」部屋を分離することで快適かつ女性の家事労働をもラクにする、合理的で斬新なライフスタイルを団地に取り入れた。そして、「食事ができる台所」を「ダイニングキッチン」と命名したのだ。

団地には、その後もステンレスの流し台や換気扇、洗面化粧台、給湯暖房機など、新たに研究開発された住宅設備などが続々と導入。日本の住宅をリードする研究開発の系譜は、日本住宅公団から



開発したシート状の床材は薄い素材なので使用の幅が広がる。

工法」だ。現在よく使われているフローリング材は、基材となる木材の表面に木目を印刷したシートが貼ってあるものが多い。この工法では、その表面シートに注目。

従来のリフォーム用床増張り材より格段に薄い0.2mm厚のシートをシート状に改良。リフォームの際にフローリング材をはがさず、上から張るだけで床をよみがえらせる工法を編み出した。大がかりな床の張り替え工事が不要で、工事期間を大きく短縮、騒音や廃材が出ることもなく、コストも低減。「切って、張る」だけなので、昨今の職人不足にも対応できる。開発に携わったUR技術・コスト管理部の桜井宏行に、開発の経緯を聞いた。

「近年は賃貸住宅のインテリア性が重要視され、修繕だけでなく流行に合わせて床材を張り替える需要も増えています。従来も板状の増張り材はありましたが、厚みがあるためにドアがあかなくなるなどの不具合や、再度の張り増しができないなどの難点がありました。ごく薄いシートがあったらと思っていたところ、以前からUR

賃貸住宅の床リフォーム工事で実績のあるナオス・テックさんが手を挙げてくださり、2018年から共同開発を始めました」

ナオス・テックの佐藤喜政取締役会長は、「一番苦労したのが、裏面の接着剤です。接着力が強すぎると施工効率が悪くなりますし、弱すぎるとシートが剥がれてしまいます。そのため、成分の配合比や種類を何度も変更し、耐久性テストや温度テストを重ねて、耐久性と施工効率を兼ね備えた接着剤が完成しました」と話す。

床暖房にも対応可能で、1年の試験施工で耐久性なども実証済み。リフォーム需要が高まるなか、簡単に素早く施工できる工法として、今後大きな注目を集めそうです。

室内の匂い悩みを解決

さらにもう一つ、URが日本総合住生活、ナオス・テックと共同開発したのが、「空家臭気低減工法」だ。他の家を訪れると、その家独特の匂いに気づくことがあるのではないだろうか。住んでいる人は気にならなくても、いつの間にか染み付いたさまざまな生活臭

新たな床改修工法を開発

URは団地の建て替え事業のほかに、団地の良さを見直し、今の暮らしに合わせた室内改修（リニューアル）も実施。工事における騒

音の発生や施工期間の長期化等の課題と向き合うこととなり、技術開発のニーズも変化を遂げてきた。そんな時代の要請に合わせ、URが、フローリング床改修のノウハウを有するナオス・テックと共同開発。5月に発表したのが、リフォームに適した「床シート増張り工事における床上張りシート

は、特に近年の生活スタイルの多様化に伴って増加。住む人が入れ替わる賃貸住宅にとって1つの課題になっている。この工法は、その匂いの根源にフォーカス。匂いの元になる90種類以上もの匂い成分を測定・分析。室内を40℃ほどに暖めて臭気物質をあぶり出し、成分ごとに最も適した薬剤や中和方法などを使って極限まで消臭。世界最高レベルの空気清浄機で吸着する。さらに匂いを通さない特殊シートを匂いの元に直接貼付けて封じ込める、かつてない徹底的な消臭工法だ。

「使用する薬剤は、薬局で手に入る重曹やクエン酸、次亜塩素酸ナトリウム、過酸化水素水などで少し、特別な道具も使わず、作業期間は約1週間と従来より圧倒的に早まりました。熱心な職人さんに恵まれたことも幸運でした」とURの桜井。発表から約1年たち、約120件の施工物件での実績を数える。UR物件のほか、民間のリフォーム物件やホテル、病院、介護施設などからの依頼も増えているという。URとの共同開発について、ナ

オス・テックの佐藤取締役会長は「各工法の開発では、迅速に多種多様な実験施工場所をご提供いただき、改良や見直し、さらなるアイデアの提案などを一緒に行うことができました。団地の様々な物件を見ることが、多くのアイデアが生まれます。団地はリフォーム商材開発の『宝箱』です」と話す。2つの技術開発を手がけた桜井は、現部署に異動する3年前までUR賃貸住宅の改修現場最前線を経験。現場で直面した課題が、アイデアの発案に結びついた、と語る。

「現場で住民の方々の生活感や声を聞き、どうしたら喜ばれる商品になるかを日々考えてきました。これから民間企業と連携し、URの団地で見えてくる課題に取り組みすることで、幅広い方々に利用していただける技術を開発していきたい」団地から生まれる新たな技術開発の歴史は、これからも続いていく。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社